

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈6〉

－平成21年度実施プログラム－

若杉雅夫・三羽佐和子・松尾良克・伊藤功子・長谷部和子
篠田美里・杉山喜美恵・田中ヒロ江*

実践の概要

子育て支援プログラム「あそびの森」の実践活動は今回で6年目となる。開設時の目標である地域の親子・学生・教員が協働でプログラムを実践し、育つという取り組みは、例年地域のニーズに応えつつ反省し、その経験を生かし、年々改善され進歩している。それは、地域での実習評価や毎年増加しつつある参加数にも表れている。

学生の育ちを捉えてみても、在学時の早い時期から地域の親子に触れ合い、関わりを持つことが、その後のゼミ活動や実習の態度、職業意識への目覚め、人間としての成長、親に対する言葉遣いや心構え等、保育者として総合的なスキルを培う意味でも良い経験を養う場所となっている。

今年度の新しい取り組みとして、東海学院大学「子ども学科」すべての学生がプログラムに参加したことである。これは同じ幼児教育を志す学生が短大・四大を問わず、共に学ぶ場で協働する経験が、お互いの成長を促すことに結びつくと実施した。短大と四大の枠を取り払い、お互いが同じ土俵に上がることで双方が切磋琢磨することになり、成長することに繋がる。

さらに教員側の立場からすれば、この6年間の取り組みと今年度の新しいプログラムが、双方の学生たちにもたらしているものやその及ぼす影響など違った視点から見る事ができた。

今後とも、実践してきた経験が幼児教育を学ぶ学生たちのより良い成長に結び付けられるよう日々努力を怠らないようにしたいと考えている。

平成21年度「あそびの森」プログラム

<月例プログラム>

- ① 絵の具でバタバタ遊びをしよう
5月23日 三羽 佐和子

- ② 子 新聞紙で遊ぼう 親 子育て懇話会
6月27日 若杉 雅夫
- ③ 音で遊びましょう
7月11日 篠田 美里
- ④ 親子で遊ぼう「できるかな？」
8月29日 伊藤 功子
- ⑤ 親子で紙のおもちゃを作って遊ぼう
9月19日 松尾 良克
- ⑥ 楽しく歌ったり踊ったりしよう
10月17日 三羽 佐和子
- ⑦ 「ぐりとぐら」になろう
12月5日 杉山 喜美恵
- ⑧ クリスマス会（ハンドワーク）
12月19日 長谷部 和子
- ⑨ 子 紙テープを使って遊びましょう
親 子育て懇話会
1月16日 篠田 美里
- ⑩ 粘土遊びでクッキー作り
1月30日 若杉 雅夫
- ⑪ 親子で作るペーパーアート
2月13日 田中 ヒロ江

<その他のプログラム>

- ① ブラジル人親子支援
12月13日 1月10・24日 2月7日
長谷部 和子 杉山 喜美恵
- ② クリスマス会 12月9・16日
長谷部 和子 杉山 喜美恵
- ③ 子育て講座・子育てを考える講座
10月21・29日 杉山 喜美恵
- ④ 学生さんと遊ぼう！
11月4日 杉山 喜美恵
- ⑤ 長森子育てグループ
5月27日 1月20日 杉山 喜美恵
- ⑥ 長良児童センターでのプログラム
4～9月8回 杉山 喜美恵
- ⑦ 高富児童館落成式行事
3月31日 長谷部 和子 三羽 佐和子

*東海学院大学

1. 活動報告

プログラム①

活動名 「絵の具でべたべた遊びをしよう」

実施日 H 21年5月23日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ 絵の具のべたべた感を味わったり、手や足でも絵が描ける楽しさを味わったりする。
- ・ 手型、足型で偶然にできた、さまざまなデザインを楽しむ。

担当者 三羽 佐和子

参加人数 165名 参加家族60組

(子ども89名/保護者76名)

※ 以後参加人数は午前・午後トータル

参加スタッフ 教員8名 学生27名

内容

1. はじめの会
年度初めの挨拶
手遊び(ピカチュー・はたけ)
2. 絵の具遊び
3. あとかたづけ
4. 終わりの会
ディズニー体操
絵本の読み聞かせ
(ぐりとぐら・おべんとうさん)
挨拶 さようなら



遊びの様子

今年度初めての「あそびの森」ということで、欠席者が少なく人数が多く大変だったが、遊びが盛り上がった。

絵の具遊びでは、子どもたちは、赤・青・黄色の絵の具がついたタオルに手足をつけ、シートの上の長い紙の上に、手型足型をつけて遊ん

だ。自分たちがつけた形の様子を見たり、友だちの付けた足型にわざと乗せたりしていた。

紙面のあちこちに手型を押ししたり、走り回ったり、後ろ向きで歩いたり、四つんばいになったり等さまざまな方法で楽しむ姿が見られた。家ではできない遊びなので、殆どの子が大喜びであった。やったことのない活動なので、最初は尻込みする子もいたが、学生や親に勧められたり、どのようにするか友だちのしているのを見たりするうちに、挑戦してみようと指先に絵の具を付けることからはじめたところ、楽しくなって思いっきり遊んだ子もいた。

保護者も一緒に行っていたが、母親は汚すことを気にしていたようだが、父親は子どもと同じように、ダイナミックに楽しむ姿を見せていた。

手型足型を画用紙に写し、それを持ち帰るように準備がしてあったので、子どもや保護者自身の手型足型を切って、黒い紙に貼り付け、記念に持ち帰るなど、保護者自身も楽しんでいた。

大型絵本は、どの子も喜んで、学生の読み聞かせに食い入るように見ていた。

総括・反省および考察

学生達は、リハーサルを行ったことと、遊び方がわかっており、それぞれが自分の役割を積極的に行っていた。ただ、絵の具を準備するのに少し手間取ったので、もう少し、手際よくできる方法を考えるとよかった。

参加者が多かったことと、子どもが学生の思うようには動いてくれないこともあり、計画通りに行かず、戸惑う場面が多々あった。例えば、絵の具を染み込ませているタオルを絞る子がいたり、足で力一杯タオルを踏みつけるので、タオルの容器が壊れてしまったり等。タオルを入れる容器が発砲スチロールだったので壊れやすかったのだと思う。今回の反省により、今後はプラスチック製の容器など、壊れにくい物を用意するとよいと思う。

今回の学生は、1年生の時と合わせて2回目の経験ということと、実習も経験していることから、自分たちで考えながらその難局をなんとか切り抜けることができた。この経験が学生たちにとって自信につながったと思われる。

また、学生たちは子どもたちと実に生き生きと活動していた。自分自身が楽しむこともできるようになってきている姿に、成長を感じた。

学生の反省文を以下に掲載する。

・ 「あそびの森」に参加するのは、久しぶりで緊張気味であった。以前は先輩の後に動いていただけだったので安心してできたが、今回は責任感をもって活動した。



出来上がった作品を見る

まず、本番前に「絵の具遊び」担当が「ディズニー体操」の準備を行った。「絵の具遊び」では実際に自分たちが遊んだときに気付いたことや、どのようなポイントを伝えわかりやすくするかを、スケジュール表にメモをした。

体操も学生全員で事前に練習したときに、他の子を見て、大きい振り付けをした方がわかりやすいし、楽しくできると感じ、本番でもそのポイントを押さえるようにした。

・ 受付係になったので、流れをつかめるか不安だったが、先生が丁寧に教えて下さったので、すぐにやるべきこと、流れを把握することができた。スムーズに受付ができて、参加者に嫌な思いをさせずにすんだのでよかった。

・ 自分から子どもに声をかけ、コミュニケーションをとりました。いきなりではびっくりしてしまうので、着ている服のキャラクターや柄を見て、「かわいい絵だね」「かっこいいね」と声をかけました。そうすることで、子どもも「あっ、知っているんだ」「ほめてもらえた」という思いを持って嬉しそうに話をしました。

等々。

これらの記録から学生の学びや成長が見とれ、この積み重ねを大切にしたいと感じた。

プログラム②

活動名 子ども 「新聞紙であそぼう」

保護者 「子育て懇話会」

実施日 H 21 年 6 月 27 日 (土)

10:00 ~ 12:00 13:30 ~ 15:30

ねらい

- ・ 思いっきり気持ちを発散する。
- ・ 自由な活動で、子どもの気持ちを和らげ、「あそびの森」に慣れ親しむ。
- ・ 想像力を刺激し、感受性を高める。

担当者 若杉雅夫

参加人数 135 名 参加家族 50 組

(保護者 59 名うち父親 9 名 子ども 78 名)

参加スタッフ

教員 7 名 うち懇話会 4 名

学生 36 名 うち四大生 8 名

内容



新聞紙の兜で遊ぼう

今回の遊びの内容も今まで同様、新聞紙をちぎったり破ったりする機能的快樂遊びが主となっている。しかし、これまでと違い子育て懇話会と同時開催するため、親と子が別々のプログラムに参加することとなる。当然、新聞紙遊びは子どものみの参加となる。そのため、親から子どもがスムーズに離れられるように、はじめの説明時間を簡略化し、手遊びや楽器演奏の時間を長くした。

また、新しく新聞紙の兜作りを取り入れて、遊びに対する意欲や期待感を高めた。このことが功を奏してか、無理なく親と離れ、活動が活発かつ円滑に展開した。日常のストレスを思いっきり発散するかの如く、子どもも学生も共々自由闊達に遊びを楽しむことができた。

破って気持ちを発散させた後は、後片付けも兼ねて部屋一杯に散らばった新聞紙を段ボールのブルドーザーで中央に集め、新聞紙の山を作り、飛び込みゲームを楽しんだ。

最後に、スーパーのポリ袋に新聞紙を詰め、お手製ボールを作った。その時点で、懇話会を終えた親も加わり、全員でドッジボールやボール回しゲームを楽しみ、お互い心を通わせて遊びを終了した。



新聞紙を破って気持ちを発散

総括・反省および考察

今回は、親と子が遊びをとともにするプログラムではなかったため、従来の新聞遊びの内容を簡略化し、破った紙片から連想しての表現活動を計画の段階から省いた。全体としては、遊びの簡略化が、参加した子どもにも、支援する学生にとっても受け入れ易かったのか、余裕を持っておおらかに伸び伸びと遊びに興じる子どもと学生の姿が、強く心に残った。プログラム実施のねらいの達成に心を奪われることなく、参加する親や子ども、支援する学生の実態を熟慮してプログラムの内容に工夫を重ねる必要性を感じた。

部分的には、怪我等の危険防止に関して、二点ほど問題が浮かび上がった。まず、新聞紙の山に飛び込む遊びでは、子どもがダイブする順番を守ることに細心の注意が必要であることと、山の下の方には、何らかのクッション材を敷くことである。大事には至らなかったが、あそびに夢中になって順番を守りきれず子ども同士でぶつかってしまい、機嫌を損ね拗ねてしまった子どもが一人見受けられた。その子どもに付いていた学生が、根気強く対応してい

たが、なかなか機嫌が戻らなかったことが印象に残っている。学生にとっては、不慮の事故に対する対応という点では勉強になったと考えるが、主催者としては万全の注意を払ってプログラム実施に臨む必要性を強く感じた。

そのほか、参加した父親9名のうち半数以上は、懇話会には参加しないで子どもと遊びをとともにした。遊びを支援する側としては、大変助かったが、子育て懇話会の趣旨を考えると残念な結果であった。今後、父親には、懇話会への参加を促して行きたいと考えている。



新聞ボールでキャッチボール

最後に、学生の支援も積極的に子どもに関わろうとする姿勢が見受けられ、授業での取り組みの成果が表れつつあると感じた。

プログラム③

活動名 「ポンポン トントン シャツシャツ
コーン 音で遊びましょう」

実施日 H 21 年 7 月 11 日 (土)
10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ 身近にある廃材を使って音のでるおもちゃを作り、その音を楽しむ。
- ・ 歌にあわせて踊る表現を通して親子のスキンシップを楽しみ、気持ちを開放する。

担当者 篠田 美里

参加人数 139名 参加家族 50組
(保護者 58名 子ども 81名)

参加スタッフ 教員8名 学生15名

内容

- 1 演奏・・・マリンバのひびき
- 2 手遊び・・・こぶたのさんぽ
- 3 どんなおとがきこえるかな？

- ・ かちかちたぬき
- ・ りすのばいおりん
- ・ かえるのげこちゃん
- ・ ぎざぎざいた
- ・ ふくろまらかす
- ・ ミニドラム

みんなでおもちゃのチャチャチャ

- 4 大型絵本 (どうぞのいす)

総括・考察

この活動は、担当教員が提示したテーマ「音探検」を、2年生が内容(遊び)を出し合い、プログラムを構成し、当日の進行を担当したものである。今回は身近にある材料を組み合わせ、手作り楽器を作り、思いがけない面白い音を発見し、楽しめるよう工夫した。学生はグループに別れ、教員の提示に自分たちの工夫を加え、遊びを創作していった。製作過程において、お互いのグループを見比べながら、子どもが興味を示してくれる形を求めていった。材料の調達に関しては、自分たちだけでは追いつかないため、クラスの仲間呼びかけたり、アイスクリームの空箱欲しさに大量に食したり、と楽しんで準備した。容器等は他のもので代用するようにすすめたが、子どもは同じものを欲しがるから

と集めるのに苦労していた。

近頃の学生は、この様に見通しを立てて進めていかなければならない活動を苦手としている。しかし、自分たちに任される部分が多いほど自主的に取り組めるようになり、様々な発想が湧いてくる。これもこの活動の良い効果である。

今回、自分たちの得意なマリンバ演奏を聞いてもらおうと、わざわざ楽器を運搬し、プログラムの中に入れた。重いマリンバを移動することを覚悟して、演奏をプログラムに入れたことは学生の「子どもに聴かせたい・この「あそびの森」に招待した子どもたちを楽しませたい」との思いが高まった証でもある。この意欲の高まりが学生の取り組み意欲の高まりに繋がったといえよう。つぎに、用意した手作り楽器の音をイメージし易いように各コーナーに工夫した名前をつけた。もう一つ、手作り楽器ばかりでなく、実際の楽器もさりげなく入れ込んだ。

子どもが様々な音体験の中から美しい音を探し、楽しむ、また、手作りのおもちゃから生まれる思いがけない音を楽しむ活動は、子どもも学生も楽しむことが出来た。



マリンバの音色を聞いてね

大型絵本は学生が大好きな「どうぞのいす」を選んだ。読み手の学生の表現につられて子どもたちが作品の中に入り込み、とても楽しそうであった。読み進むに従ってどんどんお話に参加する子どもが増え、お話を楽しんでいる子どもを間近にした学生の心も弾み、子どもと、学生が楽しい時間を共有する事ができた。

プログラム④

活動名 親子で遊ぼう 「できるかな？」

実施日 H 21年8月29日 (土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ 発育・発達の著しいこの時期に、動作が上達する巧みな動きや協応能力を身につける。
- ・ 家庭で楽しめる親子体操、運動の基本の一つ投能力と跳能力を中心に、マットの上を転がったり、手作りの遊具で跳んだり、投げたり自ら挑戦する意欲や活発な行動を身につける。

担当者 伊藤功子

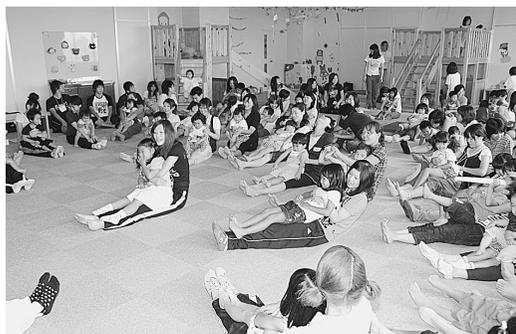
参加人数 155名 参加家族47組

(保護者52名/子ども71名)

参加スタッフ 教員6名 学生26名

内容

1. 手あそび：子豚の散歩
2. 体操：ディズニー体操
3. 親子で体操
4. 転がれるかなあ：マット
5. 跳べるかなあ：カラーラダー、バンブーダンス、マスジャン、丸太わたり
6. 投げてあそぼう
7. みーちゃんのお話



親子で体操

総括・反省および考察

時期が夏休みということで、学生には役割分担表を休み前に渡し当日確認ということで進めた。親や子どもへの関わり方がうまくなり、今までの経験が自信となって現れた結果と思われる問題なく進行できた。

手遊び、ディズニー体操は学生の言葉がけが

上手く喜んで取り組めた。親子で体操は、親子でできる簡単なものであるが、今回は子どもを宙に浮かせたり、子どもの手を支えて地から足を離すなど親さんもちきどきしながら熱心に取り組んでいた。



丸太わたり



マスジャン

今回の「できるかなあ」は6箇所にセットした所を自由に体験できるような場面設定をした。各コーナーには、学生を配置し責任を持って見守り支援を行った。前回も登場しているカラーラダー、バンブーダンスは学生の適切な言葉がけによりリズム良く跳べるようになっていた。さらに今回は、マスジャンとって布地を巻いている芯を利用して9マスを作り、片足や両足を使って跳ぶものである。年齢差に関係なくできるので良い遊具である。また、同じ芯の太いものを利用して丸太わたり、細いものでは6本ぐらい揃えて転がし地震を想定して、その上に乗ってバランスをとりながら地震がおさまるまで耐える。年齢が低い子でもうまくバランスが取れていた。これは予想外の行動であったが、遊びは子どもの中から生まれることを実感した1日であった。今後も廃品を利用した遊びを考えていきたい。

プログラム⑤

活動名 「親子でおもちゃを作って遊ぼう」

実施日 H 21年9月19日（土）

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ 親と子どもが1つの作品を一緒になって作る事により、親と子どものコミュニケーションをはかり、また、できあがった作品で、いっしょに遊び楽しむ。

担当者 松尾良克

参加人数 154名 参加家族 28組

（保護者 30名 子ども 48名）

参加スタッフ 学生20名 教員5名



うまく切れるかな

状況

参加家族は、午前の部では申込37組のうち18組（48.6%の参加率）で52名の参加者があり、午後の部では、申込36組のうち10組（27.8%の参加率）で26名の参加者となった。

作成用紙は事前にインターネットサイトで無料公開されている作品を印刷し、袋詰めをして準備しておき、受付時に参加者に配布した。

内容

活動開始時に、学生による手遊びで子どもの気持ちを引きつけた後、ペーパークラフトの作り方や出来上がった作品での遊び方などの説明を行い、作品作りに入った。

ペーパークラフト作成では、切る・折る・貼り付けるの作業があり、各参加者は親子共々、夢中で作業に没頭していた。2人以上の子どもと参加した家族に対しては、学生がそれぞれの子どもに付き添い、子どもと一緒に作品を作り、保護者や子どもとのコミュニケーションを取りながら、楽しんでサポートを行っていた。

た。

参加者の中には初めてペーパークラフトを作る人もあり、子どもより夢中で作品作りに取り組んでいる保護者の姿も見受けられた。子どもも自分で切ったり、貼ったりして色々な作品が出来上がることに喜びを感じていたようだった。

作品には、グライダー・紙（竹）とんぼ・指人形・吹きごま等があり作成後、親子で飛ばしたり、回したりして楽しんでいた。

総括・反省および考察

小さな子どもにとって、はさみを使い、「線にそって切る」という作業は至難の業であるだろう。上手に切れた時など、親に自慢げに見せていた子どももいた。

ペーパークラフト作成は、マニアックなところもあり、普段の生活では目にすることも少ない。今回参加された保護者の方からも、「初めて作るのだがとても楽しい。他にも色々あれば教えてほしい。」との声も聞かれた。

また、家庭でははさみを使う機会も少なく、子どもが上手にはさみを使う様子を目の前にして関心されている保護者の方もおられた。

今回も作成する作品を選ぶに当たり、インターネット上では数々の作品が紹介されているが、「子どもが作る」ことを基本に、簡単に出来るもの、作った後で楽しめるもの等を考慮しながら探したが、適当な素材を見つけるのに難しさがあった。

また、参加者の中には、就園前の子どもも多く、今以上に簡単に作れ、楽しめる作品を探す必要性を感じた。



できたら遊ぼう！

プログラム⑥

活動名 「楽しく歌ったり踊ったりしよう」

実施日 H 21年 10月 17日 (土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ リズムに合わせて歌ったり踊ったり、体操を動かしたりして、親や友達と一緒に楽しく遊ぶ。
- ・ わらべうたの歌詞、リズムなどに親しみを持つ。

担当 三羽 佐和子

参加人数 90名 参加家族 33組

(子ども 53名/保護者 37名)

参加スタッフ 教員5名 学生35名

内容

1. 始まりの会
挨拶と話
手遊び (AM:子ぶたが道を、PM:ピカチュウ)
歌 (どんぐり、おもちゃのチャチャチャ)
2. ディズニー体操
3. リズム遊び (なべなべそこぬけ、ジャンケン列車、ロンドン橋落ちた)
4. 絵本の読み聞かせ
(たまごにいちゃん、ぐるんぱのようちえん)
5. 終わりの会 (手遊び)
手遊び (AM:キャベツ、PM:ディズニー)

遊びの様子

子どもたちは後期1回目とはいうものの、リピーターが多く、「あそびの森」に慣れているようで、保護者から離れて学生と遊べる子が多く見られた。

「なべなべ底抜け」では遊びが進み、全体で1つの輪になり、なべなべ底抜けがうまくできたときには、子どもたちも親も学生も気持ちが一つになり、感激した。

「ジャンケン列車」はジャンケンのわからない子が親のリードで楽しむことができた。最後まで残った子は前に出て名前を言ってみんなに拍手され、うれしそうであった。子どもが楽しめるようにすることが一番である。

「ロンドン橋落ちた」では子どもたちは学生たちにつかまらないうように急いだりゆっくりしたりと考えてくぐり、楽しんでいた。捕まるとくすぐ

られるというスリル感がうれしいようだった。

総括・反省および考察

前々週の水曜日に1年生に教えるつもりで、2年生が遊びをやったことと、前週にもリハールを念入りに行ったこともあって、比較的スムーズに進んだように思う。

それぞれ駐車場・案内・受付等仕事があったが、ほんやりしている学生はいなくて、比較的まじめに自分の仕事をこなしていたように思う。

始まりの会も帰りの会も落ち着いて子どもたちが参加していたのは、何回も来ていて、楽しいことがわかっているからだと思う。絵本は特にうれしいようで、あちこちに散っていた子どもも集まってきて、学生の読むのを楽しんで聞いていた。読み方もうまくなってきたと感じる。



「ロンドン橋落ちた」で橋を通る

多くの子どもが、主な活動のリズム遊びに参加したが、年齢の低い子や男の子の中には参加をしない子もいて、親への働きかけも必要と思われた。親子2人組でできるリズム遊びをもう少し取り入れた方がよかったとも思う。

2年生は実習経験もあり、また、「あそびの森」の経験も3回目であることから、子どもたちの前に立っても自信を持って行う子が多く、担当者としては安心して任せることができた。

初めての参加である1年生にも手遊びを説明から全てさせたが、午前の2年生を見習いながら、なんとか子どもたちにさせることができた。1年生も場を踏むことが大切なので、グループみんなで支え合いながら行うように指導したが、思った以上にできた。顔の表情は少々硬かったが来年はきつとにこやかにできるだろうと思う。

プログラム⑦

活動名 「ぐりとぐら」になろう

実施日 H 21年12月5日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ ぐりとぐらになりきって大人も子どもも絵本の世界を楽しむ。
- ・ みつあみを使って衣装作りをすることで手を動かすことの大切さを知る。
- ・ 親子で1つのことに取り組むことによって親子の時間を楽しむ。

担当者 本間恵美・杉山喜美恵

参加人数 108名 参加家族40組

(子ども44名/保護者64名)

参加スタッフ 教員7名 学生38名

内容

1. 大型絵本『ぐりとぐら』*
2. 「ぐりとぐら」になろう！
帽子・ベスト・しっぽの作成
3. みんなで食べよう！
蒸しパンを食べる
4. 大型絵本『ぐりとぐらのおきゃくさま』

総括および考察

報告者は地域で読み聞かせ活動を行っており、以前より「あそびの森」でも絵本を題材にしたあそびを実施したいと考えていた。そこで、今回は長い年月子どもたちに人気のある『ぐりとぐら』を題材にした遊びを提案することとした。



製作の様子

ぐりとぐらになりきるためには外見から入ることで気分も盛り上がりと考え、まず最初に衣装製作を行った。それぞれがぐりになるかぐらになるか(青を選択するか赤を選択するか)親

子で決め、帽子・ベスト・しっぽを作った。

最近では手指を動かして行う作業が苦手である子どもたちが多くなったと保育者から聞くことが多くなった。そこで、両手の供給作用が必要なみつあみの仕方を親から子に伝えてほしいと考え、しっぽはすずらんテープをみつあみにして作ることとした。

製作では子どものためにベストの大きさを調整したり、ベルトを作ったりとさまざまな工夫をこらし真剣に取り組む保護者の姿が見られ、終了時には、保育実習室が個性豊かなぐり・ぐらワールドとなった。

『ぐりとぐら』のメインはなんといっても彼らが作るカステラであろう。何らかの形でこの楽しみは取り入れたいと考えていたところ、今回は食に詳しい教員の協力を得ることにより、「蒸しパン」を提供することが可能となった。アレルギー、調理時間、調理のしやすさ等を考慮して「蒸しパン」という選択をした。



提供された蒸しパン

衣装の製作に予想より時間がかかったこと、食べものを提供するというで手洗いに時間がかかったこと等、予定より時間がおしてしまい、全体にあわただしい感じになってしまった。もう少しゆったりとした雰囲気でない『ぐりとぐら』の持つ世界観は味わうことができない。欲張りすぎた感があり、反省点である。

* ぐりとぐらは、中川季枝子、大村百合子(結婚後は山脇)姉妹の描いた絵本『ぐりとぐら』(福音館書店、1963年)に出てくるキャラクターである。シリーズで『ぐりとぐらのおきゃくさま』(福音館書店、1966年)もその1つ。(出版年は初出)

プログラム⑧

活動名 「クリスマス会ーベル作りー」

実施日 H 21年 12月 19日 (土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

ペットボトルの廃材からクリスマスベルができること、親子でペットボトルの蓋に穴をあけ、そこに一緒に毛糸で編んだ紐を通し、ベルを付ける。そして、ペットボトルの上部にマジックや簡単なオーナメントを張り付けて装飾する。これらを親子で取り組み精巧な美しいものを完成させて、一緒に、作品を完成させる喜びを分かち合う。

担当者 長谷部和子

参加人数 111名 参加家族 26組

(保護者 30名 / 子ども 41名)

参加スタッフ 教員 4名 学生 36名

内容

クリスマスが近づいているため、子どもたちのクリスマスに対するイメージは大きく膨らんでいた。そのため、ベルを作ることに積極的に取り組む姿が見られた。

ペットボトルにハサミを入れるのは親さんの仕事、毛糸で紐を作るのは親子での共同作業、シール貼りやベルのカサに絵を描くのは子どもさんと、それぞれの分業でないと上手くできない作業であったため、親子作業として成功した。

完成したベルを鳴らし、クリスマスソング「あわてんぼうのサンタクロース・赤鼻のトナカイ」の歌を皆で唄ったが、自分の作ったベルを鳴らすことが嬉しいらしく、ベルを見ながら鳴らしていた。



完成したベルを鳴らしながら唄う

その後、パネルシアター「森のサンタクロース」を演じ、最後は学生が演じるサンタクロースが大きな袋を部屋の外から部屋の中に運び、その袋から出ている紐をひっぱり、付いている番号のお土産を学生からもらって終了した。お土産の中身は学生手作りのクリスマスにちなんだ作品であった。

総括及び考察

この年は、新型インフルエンザの大流行とあいにくの雪で親子の欠席者が多かった。少人数の参加者は残念であったが、学生が家族に2人付くことができ、きめの細かい援助ができたのは、思いがけない利点であった。

クリスマスというイベント傾向の強い催しの場合、子どもはプレゼントを貰うことを当たり前と感じ、プレゼントの中身について不満が出ることがある。これは子どもがプレゼント攻勢に慣れすぎ、手作りの地味さに感動を覚えないことにもなり、今後の子どもたちの将来について考えてみても、社会全体、大人が考えていかなければならない事項だろう。



パネルシアター「森のクリスマス」上演中

プログラム⑨

活動名

子ども 「紙テープを使って遊びましょう」

保護者 「子育て懇話会」

実施日 H 22年1月16日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

こども・学生と一緒に紙テープを使って、製作やゲームをする活動を通して、新しい素材に出会い、遊びの体験をする。

- ・リズム遊びを通して歌う喜びを感じ、気持ちを発散する。

保護者・日頃の育児に関して、皆とわいわい話し合う機会を通して、自身の育児をみつめ、日頃の育児に関して様々な気付きと問題解決の機会を得る。

担当者 篠田 美里

参加人数 73名 参加家族 28組

(保護者 30名 子ども 43名)

参加スタッフ 教員8名 学生 45名



何ができるかな

内容

- 1 手遊び・歌・・・棒が一本
 - ・おもちゃのチャチャチャ
- 2 ゲーム・・・よーいドン
- 3 紙テープを使って遊ぼう
 - ・おはな・てまり
 - ・いもむし・びっくりばこ
 - ・うどん・スパゲッティ
 - ・ふしぎなふーせんかっぱ
- 4 ゲーム・・・テレパシー
- 5 大型絵本 「ほくらのくれよん」
 - 「はじめてのおつかい」



ちょっと難しいかな

総括・考察

この回は、保護者は隣の部屋で懇話会（詳細と考察は別記）を行い、子どもはお姉さんと一緒に紙テープの製作遊びをする計画であった。幼児の気持ちとして、せっかくお母さんと一緒に遊びに来たのに別々の部屋にされることは寂しいことである。よって、はじめは少々元気が無い。学生は、そんな子どもたちの心情に寄り添い、あの手この手で気持ちをほぐす。コミュニケーションが成功したペアからだんだん楽しい製作に取り掛かり、だんだん活気が出てくる。

子どもが「やる」というまで根気強く、子どもの気持ちに寄り添って関わっている姿は、後輩たちの心に響き、良き手本となった。

紙テープの素材は身近にあり、やわらかい素材でできているので幼児でも扱いやすい。また、多くの色彩があり、彩りを楽しむこともできる。学生たちは、花や手まり、ロボットなど、夢中で凝み入ったものを試作し、どの部分を子どもの製作とするかを真剣に議論していた。

ゲームは体を使う「よーいどん」と見て楽しむ「テレパシーゲーム」を考えた。この時期は2年生が全ての実習を終えており、子どもの気持ちを良く考えられるようになり、グループでの議論も活発に意見が飛び交い、細かな部分まで見通しを立てて考えられるようになった。そんな姿から、学生の一年間の成長が窺えた。

大型絵本は、子どもたちがとても楽しみにしている時間である。どんな意図で選ぶのかを皆で話し合い、決めている。そして、どうしたらこの絵本の気持ちが伝わるのかを工夫して読み進めている。学生何人かが登場人物になりきって読み合い子どもたちにこのお話を一生懸命伝えた。

プログラム②⑨

活動名 「子育て懇話会」

実施日 H21年6月27日・H22年1月16日

ねらい

- ・ 同年代の子どもを持つ親たちが集まって、子育てについて話し合い、今後の自分の育児の参考とする。
- ・ 日頃、子どもたちと接しているときに、嬉しかったこと、楽しかったこと、悩んだこと等を、共通理解できる仲間と語ることで、気持ちを発散し、子育てを楽しむ醸成づくりをする。

ハシリテーター

高橋明子 渡里禎子 瀬地山葉矢

神谷かつ江 田中ヒロ江 三羽佐和子

内 容

数人ずつのグループに一人のハシリテーター（心理専門の先生、元幼稚園長、本学子ども発達学科および短大部幼児教育専攻の教員）が入り、進行役を務め、話をまとめた。

<話し合いの記録1・2回分>

- (Q) 2歳1ヶ月—最近おしゃべりをするようになってきたが、友だちと遊ぶときに物の取り合いや手がでることが多い。どのように教えていくといいか
- (A) けんかをしながら子どもは育っていくので、「だめ」と止めさせるのではなく、自分のものにしたいという思いを受け止めながら、相手の子もほしいことを伝えていくとよい。
- (Q) 就園の情報が入りすぎて、何を見て決めていったらよいか悩む。
- (A) 幼稚園の生活の中で、何を育てたいと思っているのか、親としての考えをきちんと持とう。園の方針がいろいろあるので、親の考えと照らし合わせて選ぶとよい。時間があれば、これと思う幼稚園を見学させてもらおうと、実際の園の姿とパンフレットとの違い等がわかってよい。
- (Q) 3歳—男児なのにピンク色を好むし、女兒とばかり遊ぶ。
- (A) だからピンクはだめと決めつけない。「男は女は」というジェンダーを植えつけることにつながるのだから、気をつけよう。特に、

色は個人の好みなので、その子の思いを大切にしたい。また、女兒と遊ぶのは、お姉さんといつも家で遊んでいるので、遊び方がわかって心地いいのだろうと思う。その子の個性と受け止めていこう。

- (Q) 5歳—行動が遅いと幼稚園で言われた。几帳面で丁寧さが表れていると思うが心配。
- (A) 粗雑でも早いことをよいと捉えるか、ゆっくりでも丁寧の方がよいと捉えるか、人によって見方や捉え方が違う。この子は丁寧にするところがよい面と捉え、先生にもそのように見て欲しいことを伝えてはどうか。



ハシリテーターを中心に話し合う

- (Q) 2歳7ヶ月—新しいところに慣れにくく、よく泣くので困る。また最近自己主張が強くなり、思い通りにならないと怒る。その姿を見て、親もすぐカッと怒ってしまう。
- (A) 自己主張が強くなってきたことはとてもよいことである。それぞれが自分の主張を持つことはとても大切なことなので、成長の姿として喜んで欲しい。親のいいなりになる子に育てないようにしたいものである。

総括・反省および考察

話の内容によっては、自分の子どもも同じような姿を見せると共感する親や、年配の親が自分の経験からアドバイスをする姿があり、親同士がうなずいたり、納得したりと、嬉しい姿を見せてくれた。現代はこういう井戸端会議のような場が少なくなってきているので、このような会を持つことはとても意味があることと思う。

どのグループも時間になっても終われないほど白熱した話し合いがなされ、親の心の発散がとても必要だなと感じた。

—グループ数名ずつにしたのがよかったようで、どの親も自分の思いを話す機会が十分にあった。充実していたように思えた。

プログラム⑩

活動名 「粘土遊びでクッキー作り」

実施日・場所 H 22年1月30日(土)

集団給食室

10:00～12:00 13:30～15:30

ねらい

- ・ 親子で楽しい手作りおやつ作りを体験する。
- ・ クッキーの生地で作形遊びをし、子どもや親の想像力を刺激する。
- ・ 食べ物を大切にする気持ちを養い、食に対する意識を高める。

担当者 若杉 雅夫

参加人数 128名 参加家族 50組
(保護者53名 子ども72名)**参加スタッフ**

教員5名 学生52名

内容

このプログラムは、毎年、食健康学科の協力を得、集団給食室を活動の場として実施している。H 17年度から今回で5回目となるが、参加者のニーズが高い点と、他のプログラムと違い食物を扱うことから、学生の学びもより深くなると考え、継続的に実施している。



生地作り

内容は初回から変わらず、親子と一緒に楽しむオリジナルクッキー作りであるが、クッキーの生地作りの工夫や甘味具合などに改良を重ね、毎回ステップアップしている。

活動内容はこれまでと同様、一つのテーブルに1～2組の家族がつき、1年生と2年生、各一名が一組となってクッキー作りの支援に当たった。

今回も参加した親子は、生地作り(白・茶・緑の三色)から始め、形作りから焼き上がり、

試食までをフルに楽しんだ。

手始めの生地作りでは、学生と親子が生地の硬さや甘さの加減をどうするか、和気藹々と話しながら、活動する姿が彼方此方に見られ、会場全体が和やかな雰囲気に包まれた。形作りでは、鳥や家、花やアニメ・漫画のキャラクター、車、お好み焼きのような大きな形などなど、子どもの柔軟な想像力に、親も学生も笑顔が絶えなかった。お子さんに触発されてか、お父さんやお母さんも夢中になってクッキー作りに没頭された。大量のクッキーの焼き上げは、食健康学科の先生が中心になってフル回転で焼成した。焼き上がるまでの待ち時間は、クッキーへの期待感からか、我慢強く待つ子どもや次の遊びに気持ちが移り、学生と元気にじゃれ合う子どもが入り乱れた。しかし、クッキーが出来上がると、元気に遊んでいた子どもも、トレーに釘付けになった。出来栄の品評会で話が盛り上がり、試食で舌鼓し、最後は大切に包んだクッキーを手に、笑顔で解散した。

総括・反省および考察

食物を扱う活動なので、毎回材料用具の準備、学生の支援、クッキー作りの方法など綿密に計画(練習に3時間かけている)し実行している。特に衛生面の管理に関しては、学生に徹底指導し、環境整備、服装、材料の管理など、回を重ねるごとに整ってきたと考えている。

毎回活動目標を掲げるが、今回は、甘さ加減について支援した学生にデータを取るよう指示した。今回、配布したレシピでは、砂糖の分量を10人分に付き150g～180gとした。このプログラムの第一回(平成17年)は、10人分に付き120gの砂糖であったが、砂糖の分量が少なすぎて甘くないと、一部の参加者や学生から指摘された。しかし、微妙な味を感じることができる味覚(舌)を幼い時期に育てることが大切であるという考えがあったので、その理念を家族にお話しして理解をいただいていた。そのためか、参加した家族から甘さを増すことに関する要望は少なくなってきたように感じられた。しかし実情は、学生が家族の要望に応じて砂糖を増量していたようであった。このことを受け、最小限度砂糖増量のレシピに変更した。

このレシピをより確実なものにするために今回は、甘さを感じる度合いの平均値を探り出すことにした。結果、本年度から採用した砂糖の分量の最高値 180 g が参加者の平均的な甘味度と判明した。微妙な味覚を育てることを大切に、かつ参加者の要望に応えるということを考えると、小麦粉 600 g に付いて 160g～180 g の砂糖が適しているであろうという結論に達した。

活動の支援は、2年生が前年度に培ったノウハウをできる限り1年生に伝えようという姿勢で、クッキー作りの説明と練習に取り組んだ。その成果か、クッキー作りの技術的援助は前回より大きく進歩したと考える。



クッキーの出来上がり

プログラム⑪

活動名 「ペープサートで遊ぼう」

実施日 H 22年2月13日(土)

10:00～11:45 13:30～15:15

ねらい

- ・ 親子で好きな絵を描き、ペープサートを作ってお話遊びを楽しむ。
- ・ 絵本・歌・体操などをして、親子と学生が触れ合い、共に楽しい時間を過ごす。

担当者 田中ヒロ江

参加人数 28組 77名

(保護者33名 子ども44名)

参加スタッフ

教員6名 学生21名

内 容

1. 体操
2. 手遊び「さかな」
3. パネルシアター
4. ペープサート作り
5. 体操「ポンポン体操」
6. 大型絵本「もったいないばあさん」

「あそびの森」に、今年度から四大生も学習の場として参加させていただくことになり、前期には参観、後期になって初めて1年生による企画・運営を任せられ、練習はしてきたが心配だった。

手遊び・パネルシアター・体操・絵本の担当を決めて責任を持って工夫し練習をしたため、自信をもって子どもの前で出来たと思う。ペープサート作りでは、それぞれの学生がお手本を作り、歌やお話に合わせて演じて見せることで、興味を引き、作り方の説明をしていった。子どもたちは絵を書くことが好きで、一人何枚も絵を書き、親は持ち手をつけて遊んでいた。最後には、全員が出来た作品を持ち、好きなお話をしてもらったが、恥ずかしさもあり、見せてくれるだけの子どももいた。家ではどのように遊んでくれたかな。

学生は、絵本・パネルシアターなど、みんなの前ですることにより不安もあったが、何回か練習をして、笑顔で一生懸命に演じる姿に、参加者が楽しく見たり参加したりしてくださったので、参加させていただいた喜びが自信になったようである。

総括・反省および考察

作るという活動は、準備や配慮が大変で、大丈夫かと思ったが、何回か打ち合わせ、実際にやってみることで、活動の展開へのイメージが持てて何とか進めることが出来た。この経験を通して、準備の大切さを知ってほしいと思う。

参加者の年齢や人数が分からない中で、ペープサートを作ったのは、個々のイメージで何を描いても活かせると思ったからである。結果は、作品を作るというより、好きな絵を描いて持ち手を付け、動かして遊ぶというものになったが、親も子どもと共に楽しんでいただけたのではないかとと思う。最後に、一人一人作品を持って紹介をしていただいたところ、親は眉をひそめつつも、にこにこ見守ってくださったことに救われたような思いだった。

寒くて家の中での活動が多い時期に、こんな楽しみ方もあることを知ってほしい。ペープサートを使うことで、日ごろの会話に変化と遊び心を加え、親子のコミュニケーションを楽しんでほしいと思う。そんな意味から、今日のねらいは、この時間と言うことでなく、家に帰ってから楽しめるよう発展してほしいと思う。

また、手遊びや体操のように体を動かすことは特に子どもは好きな活動だが、家ではなかなかできないので、「あそびの森」の遊びに組み込んで、日頃の活動意欲を発散することも大切だと思った。中には、温かくて、ジュウタンが敷いてある部屋で、お兄さんやお姉さんと一緒に遊ぶことを楽しみに来ている子もいると思われるので、そのことも大切にしたい。

短大の先生や学生の協力を得て無事に終わることが出来たことは感謝でいっぱいである。



その他プログラム①

活動名 ブラジル人親子支援プログラム

(1) 実施日時・人数：

- ① H 21 年 12 月 13 日、② H 22 年 1 月 10 日、
 - ③ 1 月 24 日（地元新聞に活動掲載）
 - ④ 2 月 7 日
- 各回とも日曜日、13：30～16：00

(2) のべ参加人数：205 人

組数：40 組

外国籍 大人：62 人、子ども：72 人 学生
ボランティア：53 人、教員：26 人、通訳：
2 人（4 回出）、講師：2 名（4 回出）、他
1 名（2 回出・公立小学校ブラジル人学級
教員）

(3) 実施場所：

本学 情報館、保育実習室「あそびの森」他

(4) 事業の具体的内容

親は日本語教室とパソコン講座に分かれ学習し、後に懇話会に参加。

子どもたちは「あそびの森」で学生たちと日本の伝統的な遊びや絵本読みなどで交流した。

① 日本語講座：

第 1・2 回「求人票の見方」、「履歴書の書き方」と就業関係

第 3・4 回：「日本の小学校の行事」、「緊急時の学校・保育所への電話のかけ方」

② パソコン講座

グラフ作りやホームページの作成方法

表 1（のべ人数）日本語／パソコン講座参加者数

日程	① 12/13	② 1/10	③ 1/24	④ 2/7	計
日本語	9	16	14	19	58
パソコン	1	1	1	1	4
計	10	17	15	20	62

その他プログラム②

活動名 「クリスマス会」

実施日・場所・担当者

山県市こどもげんきはうす

H 21年 12月 9日 (水) 長谷部和子

H 21年 12月 16日 (水) 杉山喜美恵

10:30～11:30

長良児童センター

H 21年 12月 9日 (水) 杉山喜美恵

H 21年 12月 16日 (水) 長谷部和子

10:30～11:30

参加者

山県市こどもげんきはうす

12月 9日 1歳児親子 約20組

12月 16日 2歳児親子 約20組

長良児童センター

両日ともに1歳児親子 約15組

参加スタッフ

長谷部ゼミ 教員 1名 学生 16名

杉山ゼミ 教員 1名 学生 14名

内容

<長谷部ゼミ>

1. 手あそび
2. あわてんぼうのサンタクロース
あかはなのトナカイ
3. パネルシアター「森のクリスマス」

<杉山ゼミ>

1. 大型絵本「ぐりとぐらのおきゃくさま」
2. エプロンシアター「はらぺこあおむし」
3. 劇「となかいさんのさがしもの」
4. 歌「あわてんぼうのサンタクロース」

総括・反省および考察

ここ数年定着してきた依頼である。このような地域子育て支援拠点からの依頼は、学生にとって地域子育て支援の在り方を体験できる貴重な機会であるとともに、人前でのパフォーマンスに慣れる機会でもある。

杉山ゼミは秋から地域へ出ていく機会が多く、クリスマス会に対する準備が不十分で、かなり反省が残る実践であった。

当学を信用した上での依頼であり、依頼を受ける以上は観ていただいて恥ずかしくない準備をしなければならぬと痛感した。

その他のプログラム③

活動名 第1回 子育て講座

「わんぱく祭り(ホップ・ステップ・ジャンプ)」

実施日・場所

H 21年 10月 21日 (水) 10:00～11:30

長森コミュニティセンター2階 大集会室

主催: 第5ブロック青少年育成市民会議

担当者 杉山喜美恵

参加者 未就園児とその保護者 61組

参加スタッフ 杉山ゼミ 29名

内容

1. 導入 小さな世界 (ハ・パ・ットハ・フォーマス)
2. わらべうたあそび
「おちゃを飲みにきてください」
3. 自由にあそぼう (工作: 簡単帽子舎)
4. いっしょにうたおう「さんぽ」

総括・反省および考察

昨年度の第2ブロックの実践を聞いて第5ブロックでも実施したいと依頼していただいた。自分たちの実践を評価していただいたことは非常にうれしく感じた。

ブロック単位のイベントは比較的多くの方が参加していただけるので学生にとってはよい経験になったと思う。

役員の方と話し合いながら内容を決めた。地域の方と協働で1つのイベントを行っていくことは担当教員にとっても学びの機会となった。

その他のプログラム④

活動名 第2ブロック 子育てを考える講座
みんなで遊ぼう! わくわく広場!

実施日・場所

H 21年 10月 29日 (水) 10:00～11:30

西部コミュニティセンター

主催: 第2ブロック青少年育成市民会議

担当者 杉山喜美恵

参加者 未就園児とその保護者 70組

参加スタッフ 杉山ゼミ 28名

内容

1. 導入 小さな世界 (ハ・パ・ットハ・フォーマス)
2. わらべうた遊び
「おちゃを飲みにきてください」
3. 自由に遊ぼう (工作: ぶーぶーふえ舎)
4. いっしょに歌おう「さんぽ」

総括・反省および考察

昨年度に引き続き2回目の依頼である。昨年度は当方との日程が合わず体育館での実施となったが、今年度は西部コミュニティセンターで実施することができた。また、立地もよく、昨年度より多くの方に参加していただいた。

昨年度は2ゼミでの共同参加であったが、今年度は杉山ゼミのみであったので、準備等非常に大変であった。ブロック単位のイベントは比較的多くの方が参加していただけたのでやはり2ゼミ体制でのぞめるとありがたいと感じた。

その他のプログラム⑤

活動名 学生さんとあそぼう！

実施日・場所

H 21年11月4日（水）10：00～11：30

長良公民館

主催：ながら親子ふれあい教室

担当者 杉山喜美恵

参加者 1歳児とその保護者 15組

参加スタッフ 杉山ゼミ 29名

内容

手作りおもちゃで体いっぱい動かしてあそぶ

総括・反省および考察

毎年、恒例のプログラムである。このように地域での子育て支援イベントに機会を作っていただけることは学習の機会として非常にありがたいことである。また、学生にとっても1歳児親子という母子分離が難しい時期の子どもたちの様子や親子のかかわりを体験的に学ぶ貴重な機会となっている。

その他のプログラム⑥

活動名 長森子育てグループ

実施日・場所

H 21年5月27日（水）10：00～11：30

H 22年1月20日（水）10：00～11：30

保育実習室

担当者 杉山喜美恵

参加者

5月27日（水）2歳児とその保護者 13組

1月20日（水）2歳児とその保護者 9組

参加スタッフ

5月27日（水）杉山ゼミ 15名（2年）

1月20日（水）杉山ゼミ 14名（1年）

内容

長森子育てサークルの親子と一緒にあそぶ。

総括・反省および考察

長森子育てサークルは、本学の卒業生が世話役をしている自主サークルであり2歳児とその保護者で構成されている。

児童センターや地域の子育て支援とはまた違った形態の子育てサークルでのイベントを経験することで多様な子育て支援の在り方を学ぶことができると考える。

1月は保育実習室の関係で実施近くなってから日程変更をしなければならず、参加者の方々に迷惑をかけてしまった。

今後とも継続していきたいプログラムであるので、しっかりと確認し、計画をたてていかなければならないと思った。

その他のプログラム⑥

活動名 長良児童センターでのプログラム

実施日

日にち	活動	担当
4/22	ポロちゃんクラブ補助	3名
5/13	ポロちゃんクラブ補助	4名
5/20	ポロちゃんクラブ補助	4名
6/24	学生企画（パネルシアター等）	8名
7/1	学生企画（パネルシアター等）	7名
7/8	長良児童センター	3名
7/15	長良児童センター	4名
9/2	ボディペインティング	11名

担当者 杉山喜美恵

参加者 1歳児とその親子 各回約15組

※9/2は未就園児親子35組

総括・反省および考察

長良児童センター関連のプログラムは長良児童センターが1歳児親子対象におこなっているポロちゃんクラブへの参加である。少人数の場合は担当教員が送迎を行っている。7名以上の場合は、スクールバスでの送迎をお願いしている。スクールバスでの送迎をお願いできるからこそ、これだけ数多く参加させていただくことができているので学校側の配慮に感謝している。

ボディペインティングは長良児童センターの未就園児親子対象企画である。

その他のプログラム⑦

活動名 高富児童館落成式

実施日・場所

H 22年3月31日(水) 10:00～11:30
高富児童館

担当者 長谷部和子 三羽佐和子

参加者

40組 90名 (保護者42名 子ども48名)

参加スタッフ

長谷部ゼミ 14名 三羽ゼミ 13名
高富児童館スタッフ 10名

内容

山県市の高富児童館が改築移転に伴って、式典が行われた。その際参加する子どもたちに楽しい企画「あそびの森」をしてほしいと要請され、長谷部・三羽ゼミの学生が下記プログラムを行った。

1. ハンドベル
2. 絵本
3. 手遊び
4. 体操 「ポンポン体操」
5. 腹話術人形 「ミーちゃんこんにちは」

総括・反省および考察

始まりまで、子どもたちと児童館の遊具で一緒に遊んだが、大学での「あそびの森」を経験しており、保護者がいても戸惑うことなく、自分から働きかけていく学生たちが多くいたことはうれしいことである。

ハンドベルは子どもたちにとって珍しいようで、静かに聞いてくれた。子どもたちの嬉しそうな表情に学生も満足げであった。

絵本、手遊び、体操等は1週間の幼稚園、2週間の保育園実習でも経験してきたこともあり、子どもの様子を見ながら行うことができ、学生たちの成長ぶりを感じることができた。

この経験によって、自分たちなりにやればできるという自信につながったことと思う。春期休業中の時に行うことで、多少学生の間にも不満らしき声が聞こえたが、終わってみると充実感・満足感が得られたようで、2年生に「あそびの森」を行う見通しができたようである。

このような経験を何度もすることは、着実に学生の力となることが感じられ、今後もこのような機会には参加させたいと思った。

その他のプログラム⑧

活動名 ペーパーサート劇を観る会

「あそびの森」の活動の一環として設けている「ペーパーサート劇を観る会」とは、短期大学の保育内容研究「ボランティア活動」受講生と東海学院大学子ども発達学科の田中ゼミ生とで主催している。内容は「ペーパーサート劇」を中心とした45分間のプログラム。それを持って、依頼のあった園に出張公演する会である。

平成21年度出張公演記録

プログラム構成は以下の通りである

- ①あいさつ ②手遊び ③ペーパーサート劇
- ④ゲーム ⑤リズム遊び ⑥マリンバ演奏
- ⑦絵本 ⑧さようなら

平成21年度の訪問先は以下の通りである。

○10月27日(保育園)

県境に近い山間にある在園児16名の保育所に20名の学生がスクールバスで訪問した。

保育園の保護者会会長が本学の卒業生との縁で依頼を受けた。

○11月27日(岐阜市の児童館)

1～2歳の未就園児親子の会。年齢が低いため手遊び、絵本を中心にした。会場の広さの関係でリズム遊びは省いた。

○12月5日(岐阜市社会福祉協議会主催芸術祭)

知的障害者施設の方々の芸術祭。劇やゲームを中心にプログラム構成した。四年生による手品が好評だった。

○1月15日(市内の保育所)

保護者会より依頼。11/6の予定だったが新型コロナウイルスのため休園となり、1/15に延期となった。135人の親子が参加した。

○1月23日(山県市保育園)

市からの依頼。会場となった保育園には先輩6名が保育士として働いていた。ペーパーサート劇とマリンバ演奏に人気があった。

この活動は、平成20年度までは短期大学部のみで行っていたが、平成21年度からは東海学院大学の子ども発達学科の一期生が4年生になり、卒業研究の一環として、参加することとなった。四・短合同での活動はお互いが刺激になり、良い形の交流が生まれ、相乗効果があった。平成22年度以降も続けている活動である。

平成21年度プログラムを振り返って

今年度の「あそびの森」は子ども、その保護者を合わせて1,166名の参加者があり、盛況のうちを終えることができた。「あそびの森」がはじまって6年がたち、「毎年、楽しみにしています」という声をかけていただけるようになり、地域に定着してきたことを非常にうれしく思う。

今年度のプログラムを振り返ってみると、「継続」、「協働」、「拡がり」がキーワードとしてあげられるのではないだろうか。

まず最初に「継続」ということに関しては、プログラム内容の充実と学生の育ちがあげられる。

「クッキー作り」は平成17年度から定期的に実施されているプログラムの1つである。

その中で、「クッキーの生地作りの工夫や甘味度合いなどに改良を重ねステップアップしている」、「環境整備、服装、材料の管理など、回を重ねるごとに整ってきた」と報告者が書いているように同じプログラムを継続的にこなうことで前年度の反省を次年度に生かすことができ、よりよい実践が可能となっている。

「継続」による効果は参加者にも見られる。体育あそびは内容を少しずつ変えながら継続的に行なわれているプログラムだが、「最初は座って子どもの動く姿を見守っていたが最近では一緒に遊びに参加してきている」と報告されているように保護者も一緒に遊ぶという「あそびの森」の方針が浸透してきて自然に遊びに加われるようになってきたことは継続的に行なってきたメリットであると思われる。

また、「新聞紙であそぼう」も「クッキー作り」と同様、継続して実施しているプログラムの1つであるが、今回は懇話会との抱き合わせであるため、初めて子どもたちだけの実践となった。そこで、母子分離がスムーズに行くようプログラムの内容、進め方を工夫することにより対象の違いにも対処できるプログラムになった。

新規のプログラムを入れていくことと同時に継続的に行なっているプログラムを改善していくことも「あそびの森」全体のレベルアップのためには大切なことである。

また、学生もこの「あそびの森」で経験をつむことにより、さまざまな成長が見られる。

たとえば、「楽しく歌ったり踊ったりしよう」で「2年生は実習経験もあり、また、「あそびの森」の経験も3回目であることから、子どもたちの前に立っても自信を持って行う子が多く、担当者としては安心して任せることができた。」と報告されているように回を重ねることによって自信が付き、前に立って進めていくことができるようになる。この能力は保育者にとって大切なものであるため、なるべく数多く経験する機会を持たせることが望まれる。しかし、同時に「おしゃべりに花を咲かせる学生もあり、緊張感に欠けていたので（特に2年生）今後の課題と感じた。」と報告されているように慣れることによるデメリットについての対処も必要であろう。

短大生は在籍期間が2年と短いため、後輩が先輩の学びを見る期間は四大と比べると短い。したがって効率的に2年から1年へ学びを伝えていくことが重要である。「クッキー作り」の中で「活動の支援は、2年生が前年度に培ったノウハウをできる限り1年生に伝えようという姿勢で、クッキー作りの説明と練習に取り組んだ。その成果か、クッキー作りの技術的援助は前回より大きく進歩したと考える。」と報告されているように、いかに効率よく2年から1年へ学びを伝達させるかを教員は考えていくことが求められる。

2つ目の「協働」ということについてだが、実践の概要でも述べられているように、今年度は四大の教員が1プログラムを担当した。さらに、すべてのプログラムに子ども発達学科の学生が参加しており、また「クッキー作り」では食健康学科の協力があるなど、四大との協働がさまざまな形で行なわれ定着してきている。

懇話会ではハシリテータとして本学教員を中心とした臨床心理士が参加し、「ぐりとぐらになろう」では、食の専門教員の協力を得た。このようにさまざまな分野の教員との協働をすることにより、プログラムをより充実することができた。

最近では父親の参加も増えており、父親が参加

することであそびがダイナミックになったり、普段あまり見る機会がない父親の姿を子どもたちが見るよい機会になっている。とても楽しそうに参加している父親がほとんどだが、「運転手としてついてきました」という少し傍観的な父親も見られる。今後は「父親をいかにまきこんでいくか」ということが「あそびの森」をより楽しいものにしていく鍵になるであろう。

今年度も、山県市のこどもげんきはうすや長良児童センターをはじめとして地域へでかけていく機会が数多くあった。

岐阜市の青少年育成市民会議関連のイベントに参加することができたことは、学生にとって地域子育て支援のあり方を見る上で非常に良い学びとなった。

このような活動の場の拡がりや学生の学びの深化にとって有効であるが、参加する回数が多くなると準備をする時間が十分に確保できないという問題がでてくる。限られた時間の中でいかに効率的に準備を進めていくか、教員のFDが期待される場所である。また1年次より「あそびの森」に参加し、経験する回数を多くすることで当日の動きをスムーズにし、いろいろなことに臨機応変に対処していく力をつけていくことが限られた時間を有効に使う1つの方法となりうるであろう。

また、昨年度よりブラジル人親子支援を実施しているが、このような支援対象の拡がりも学生の学びのためには重要であろう。これら1つ1つの経験が保育者となったとき、生かされていくと考えられる。

以上、今年度のプログラムを「継続」、「協働」、「拡がり」という視点から振り返ったが、「あそびの森」が参加者にとって魅力あるものであるためにもプログラムにおける新規性と継続性をどのように考えていくかまた、学生の参加の機会と準備時間の確保をどのようにしていくかがこれからの課題といえよう。

—児童教育学科 幼児教育—

平成21年度「あそびの森」運営の記録

◇運営

若杉 雅夫 三羽 佐和子 松尾 良克
伊藤 功子 長谷部 和子 篠田 美里
杉山 喜美恵 田中 ヒロ江 (四大)

◇事務担当

三羽 佐和子 川島 大司 居崎 時江

◇全プログラムの親子の名札作成 松尾 良克

◇出席カードの製作及び室内装飾 若杉ゼミ生

<執筆担当>

若杉 雅夫 プログラム②⑩
三羽 佐和子 プログラム①⑥
子育て懇話会
その他のプログラム⑦
松尾 良克 プログラム⑤
長谷部 和子 実践の概要
プログラム⑧
その他のプログラム①
伊藤 功子 プログラム④
篠田 美里 プログラム③⑨
杉山 喜美恵 H21年度プログラムを振り返って
プログラム⑦
その他のプログラム②～⑥
田中 ヒロ江 プログラム⑪



生き生きと活動する学生

平成21年度 「あそびの森」プログラム

場所：東海学院大学西キャンパス 7号館5階 「あそびの森」の部屋

<前期プログラム> 時間 AM 10時～11時45分 PM 1時30分～3時15分

No	開催日	あそび	どんなことをするの？
1	5月23日	絵の具でベタベタ遊びをしよう	長い大きな大きな紙の上を歩いて足型をつけたり、手型をつけたりして、絵の具でベタベタ遊びを楽しもう。親子とも汚れても良い服装で来てね。記念に手形・足形をもって帰ろう。
2	6月27日	⑤ 新聞紙で遊ぼう ⑥ 子育て懇話会	新聞紙を破ったりちぎったりして、気持ちを思いっきり発散しよう。紙切れからいろいろな形を連想し、造形遊びも楽しみます。保護者の方は子育てについて、楽しく語り合しましょう。
3	7月11日	ポンポン トントン シャッシャッ コーン 音で遊ぼう	廃材で手作り楽器を作って遊みましょう。また、本物の楽器にさわってみましょう
4	8月29日	親子で遊ぼう「できるかな？」	楽しく遊みましょう。跳んだり、転がったり、忙しく動きまわります。親子とも動きやすい服装で来て下さいね。タオルとお茶があるといいね
5	9月19日	親子で紙でおもちゃを作って遊ぼう	紙を切ったり組み立てたりして、おもちゃを親子で作ります。作ったものでみんなと遊ぼう。ハサミを持ってきてね。

<後期プログラム> 時間 AM 10時～11時45分 PM 1時30分～3時15分

6	10月17日	楽しく歌ったり踊ったりしよう	昔から伝わるわらべうた遊び。人数も場所も自由でできるところが素敵です。また、子どもの心も育てます。親子で一緒に楽しみましょう。家でもやってみてね。
7	12月5日	「ぐりとぐら」になろう	帽子とパンケーキを作って、みんなの大好きな「ぐりとぐら」になって、お話の世界を楽しみましょう。
8	12月19日	クリスマス会 (ハンドワーク)	私たちの手の素晴らしさを幼い時から感じましょう(ハンドワーク)。毛糸玉でスノーフレークやサンタさんを作ります。そして、ベルを鳴らしてクリスマスソングを歌いましょう。
9	1月16日	⑦ 紙テープを使って遊ぼう ⑧ 子育て懇話会	紙テープをずるずる引っ張ってみよう。そしておそば屋さんやスパゲッティ屋さんに変身。最後は、ボール遊びをしましょう。保護者の方は子育てについて、楽しく語り合しましょう。
10	1月30日	粘土遊びでクッキー作り	小麦粉を粘土に見たてて、色々な形を作って、クッキー作りを楽しみます。おいしいクッキーを作ろう。
11	2月13日	親子で作るペープサート	大好きな絵を描いて、棒をつけるだけで「あら、不思議！」動き出し、お話がどんどん広がります。遊ぶのも見るのも楽しいペープサートを作ってみましょう。
	11～1月 金曜午前	ペープサート劇を観る会	幼稚園、保育所団体別鑑賞会(団体のみ) 団体鑑賞については相談に応じます。(出張可)

平成21年度 「あそびの森」参加者数

No	開催日 (プログラム)	参加者数				
		組	子ども	親 (母・父・他)	園 施設	合計
【月例プログラム】						
①	5/23 (絵の具でベタベタ遊びをしよう)	60	89	76 (60・15・1)		165
②	6/27 (新聞紙で遊ぼう)	50	78	57 (47・9・1)		135
③	7/11 (音で遊びましょう)	50	81	58 (46・11・1)		139
④	8/29 (親子で遊ぼう)	47	71	52 (47・5)		123
⑤	9/19 (親子で紙おもちゃ作り)	28	48	30 (27・3)		78
⑥	10/17 (歌ったり踊ったりしよう)	34	53	37 (32・4・1)		90
⑦	12/5 (「ぐりとぐら」になろう)	40	64	44 (40・4)		108
⑧	12/19 (クリスマス会)	27	41	30 (22・7・1)		71
⑨	1/16 (紙テープ使って遊ぼう)	28	43	30 (26・4)		73
⑩	1/24 (クッキー作り)	50	72	53 (50・3)		125
⑪	2/14 (親子で作るペープサート)	28	44	33 (28・5)		77
	合計	442	666	500 (425・70・5)		1,166
①	12/13 1/10 1/24 2/7 (ブザル人親子)	40	62	52 (31・21)	8	122
②	全5回 (ペープサートを観る会)		298	264 (264)		562
③	出張「あそびの森」	280	186	280 (280)		566
④	ポロちゃんクラブ	175	175	175		350
	合計	495	821	771 (770・21)	8	1,600
	総合計	937	1,437	1,271 (1,175・91・5)	8	2,766

平成21年度「あそびの森」参加者数 子ども1,437名／保護者1,271名(937組) 園・施設8名
総合計2,766名